

斎藤茂吉と長崎 —長崎医学専門学校時代—

小泉 博明

日本大学大学院総合社会情報研究科

Mokichi Saito at Nagasaki —The Period of Nagasaki Medical College—

KOIZUMI Hiroaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Mokichi Saito (1882-1953) had played an active part at Nagasaki Medical College from December 1917 to March 1921. As a professor, clinician, and psychiatrist, he had accomplished his duties faithfully, but could not write enough academic papers in his field. Because of influenza and hemoptysis, his physical condition was often poor. As a result, he made up his mind to study psychiatry in Europe.

1. はじめに

斎藤茂吉は、1917（大正6）年1月12日に呉秀三先生の許で指導を受けていた東京帝国大学医科大学助手と、兼職していた東京府巣鴨病院医員を退職した。

七とせの勤務をやめて街ゆかず独りこもれば昼さへねむし

（『あらたま』『蹄のあと』大正6年）

七とせの勤務をやめて独居るわれのところに峻しさもなし（「同上「独居」同年」）

そして、同年12月3日付けで、長崎医学専門学校教授の辞令を受けた。18日には長崎に赴任し、19日には尾中守三校長の訓辞を受けた。22日になると、県立長崎病院精神科部長を嘱託された。翌年には、長崎市救護所顧問医も嘱託された。これは、精神病患者収容所（市立監置室）のことである。¹ 長崎市金屋町二十一番地に居を定めた。このように茂吉は、巣鴨病院時代の研修医という立場から一転し、研究者、教育者、臨床医という、一人で何役も引き受けるという重責を担い、張り詰めた多忙な日々を過ごすこととなった。まさに、医者としての真価が問われることとなったのである。

長崎医学専門学校の沿革は、幕末の1857（安政4）

年にオランダ海軍軍医ボンペが、長崎海軍伝習所教官として、オランダ医学を講義したことに始まる伝統と由緒のある学校である。明治となり、長崎府医学校として開設し、統廃合を経て、1901年に長崎医学専門学校となった。

茂吉の担当科目は、「四年生の精神医学および法医学であった。精神病学の理論および臨床講義が前学期、後学期とも毎週二時間、外来患者臨床講義が不定期。法医学の理論が、前学期、後学期とも毎週二時間。医学教師に適任者のすくなかった当時、一人の教師が複数学科をうけもつことはよくあったことで、ことに精神病学、法医学の両方を講じた人は何人もいる。精神鑑定が法医学者によりなされることもよくあった」²という。よって、茂吉も後に精神鑑定を依頼されている。

呉秀三の『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』³によると、長崎医学専門学校は次のようにある。

長崎ニ於テハ明治二十一四月ヨリ精神病学ノ講筵開始セラレ医学博士大谷周庵之ヲ担任シテ二十九年七月ニ至リシトキ学科ノ改正及大谷ノ洋行不在ノ為ニ休講トナリ其後ハ三十年九月乃至三十八年七月

大谷周庵三十八年九月乃至三十九年六月医学士

小川瑳五郎担任シ明治四十年七月二十六日石田昇其教授ニ任ゼラレ専ラ精神病学ヲ講義ス

これによれば、茂吉の前任者である石田昇より、新たに精神医学の専門医が担当するようになったのである。

榎田五郎『日本ニ於ケル精神病学ノ日乗』においても、大正6年12月3日付には「長崎医学専門学校精神科教授石田昇は米国・英国・仏国へ留学を命ぜられ出発す。其の留守中は（略）医学士斎藤茂吉教授となりて各代理を務む」⁴とある。ここで、注意すべきは「代理を務む」であり、石田昇が留学中の期間に留守を預かるということであった。

2. 長崎への経緯

斎藤茂吉が、長崎医学専門学校へ赴任した経緯について、当時の状況を論ずる必要がある。茂吉が巢鴨病院を辞めた理由は、養父である紀一の青山脳病院の家業を引き継ぐためであり、始めから長崎への赴任の要請があったのではない。

紀一が院長である私立青山脳病院は、日本でも有数の私立病院であり、その病室には400名余りの病者が収容されるという、隆盛ぶりであった。そして、進取の精神に富む紀一が1917（大正6）年4月20日に行われる第13回臨時衆議院選挙に出馬表明したのであった。そのために、同年1月には巢鴨病院を辞めたのであった。藤岡武雄は「茂吉は医学の論文一つ書かず、短歌に凝って医学の道がおろそかになっていたことを紀一は憂慮していた。いっそのことこの辺で巢鴨病院勤めをやめさせ、自家の病院の手伝いをさせることが得策と考えると同時に、選挙運動で留守がちとなる、自家の青山脳病院の診察に従事させることが、茂吉の為にも勉強になると考えたようである。」⁵という。茂吉にとって自らの人生は、このように自らの決定ではなく、運命づけられるものであった。そして、紀一は郷里の山形県の郡部から立憲政友会所属として立候補し、当選したのであった。⁶ そうなれば、代議士となった紀一は多忙となり、病院は留守がちとなり、茂吉は本格的に診察に専念しなければならなくなった。

さて、石田昇は自らの後任として、茂吉と巢鴨病院時代の同僚である黒沢良臣を推挙し、呉秀三先生

の立ち会いで約束を取り交わしていた。黒沢は、田端脳病院にてアルバイトをし、定職を探していたのであった。ところが、石田の留学がすぐには決定せず、夏も過ぎてしまったので、不安に思った黒沢は、内務省からの求人に応じたのであった。その後、石田の留学が秋に決定し、長崎医学専門学校の後任を呉先生が探すこととなったのである。そして、結果的に石田の留学中の期間だけということで、自家の診察だけで、定職のない茂吉が候補者となり、長崎への赴任が決定したのであった。茂吉にすれば、呉秀三先生からの話は命令であり、断ることもできず、行かねばならなかった。ただ、石田の留学中の2年半と言うことで、深刻に考えず、少しの安堵もあったのである。養父の紀一や妻てる子と共に、青山脳病院で忙殺されるよりは、異国情緒漂う遠く長崎へ、2年半ばかり行くことが、茂吉にすれば案外気が楽であったのではと推察される。

大正6年11月18日付、結城哀草果宛の書簡では、御無沙汰いたし候。小生、長崎の医学専門学校に行くやうになるかも知れず、二年半ぐらゐで帰って来る。それまで我慢してくれ玉へ。そしてうんと勉強してくれ玉へばくも當分は出来まいが来年になったらいゝ歌をつくらうとおもふ。

（略）赴任は来月上旬ごろ。⁷

とある。このように「二年半ぐらゐで帰って来る」つもりであったが、予想も出来ない事件で、かくの如くにはならなかった。

茂吉にとって、巢鴨病院時代は第一歌集『赤光』を刊行し、世人の評価を得た時期であり、歌人としての地位を確立したのであった。しかし、医者としての茂吉を見れば、医学論文の作成もままならず、相当の焦燥感があったであろう。第一次世界大戦という戦局でなければ、ドイツへ留学する計画もあったのである。

そのような状況下で、茂吉の博士論文の起草についての噂話が出た。その事に対し、書簡で次のようにいう。

1917（大正6）年5月9日、赤木桁平宛

このごろ多く籠居いたし居り候が矢張り家に居れば相當の用事有之、診察も成り居り候。歌は作れなくなりまづくなりいまのところ行づまり

の體に御座候。(略)

けふの時事新報文芸欄に小生博士論文起草中ゆゑ分哥やめるなど出で居り小生非常に迷惑感じ居り候、文壇などちがひ医界はさういふ事やかましく、小生が自分であんな事広告でもするやうに先輩同僚からでも取られると極めて残念な事に御座候、小生は實際困り居り候。⁸

同年5月11日、杉山翠子宛

博士論文云々は全く事実無根にて小生困却いたし候。実は貴女あたりの談話を時事の柴田君が著色して出したのであるまいかと僻んで想像した事もあり何とも申わけなし。あんな事を出されて小生はつくづくいやになり申候。いよいよ歌壇から退隱する決心を強め申候。しかし 歌集出すまでは作歌仕るべく候。⁹

同年7月19日、門間春雄宛

僕は一日置きに診察もするし往診もしてゐる。そこで御無沙汰してゐる(略)僕は強ひられて医者勉強もせねばならぬ。九月あたりからはじめたいとおもふ。(略)僕も気長で執拗だ、人生その方がよい。¹⁰

このように、茂吉は「博士論文云々は全く事実無根」というが、長崎へ赴任する、しないにかかわらず、現実には作歌活動を断念してでも、論文を作成することは焦眉で不可避な問題であった。臨床医としては成長したが、研究業績と称するものがなかったのである。まさに、医者としての茂吉の本領が問われる時期でもあった。

次の作品は、院長の紀一が代議士となり、代わって青山脳病院の病者を診察した頃のものである。

ものぐるひの診察に手間どりて冷たき朝飯を食む
 (『あらたま』「初夏」大正6年)
 診察を今しをはりてあが室のうすくらがりになりすわりけるかも
 (同上「室にて」同年)
 むらぎもの心はりつめしましくは幻覺をもつと
 くにたいす (同上「晩夏」同年)
 味噌汁をはこぶ男のうしろより黙してわれは病室へ入る
 (同上「晩夏」同年)
 診察ををはりて洋服をぬぐひまもむかう病室の音をわがきく
 (同上「午後」同年)
 うつつと暑さいきる病室の壁にむかひて男

もだせり

(同上「午後」同年)

3. 石田昇と長崎医学専門学校

斎藤茂吉の前任者である石田昇について論ずる。石田は呉秀三の門下生であり、その中でも俊才であった。略歴は、1875(明治8)年11月25日に仙台市の医家に生まれた。第二高等学校在学中から雄島濱太郎の筆名で短歌、詩、小説などを発表し、1907年には『短編小説集』を出版した。1903(明治36)年12月に東京帝国大学医科大学を卒業し、精神病学教室に入った。医局は巢鴨病院にあり、院長は呉秀三で、三宅鑛一、森田正馬、北林貞道、尼子四郎ら8人がいた。医科大学助手と兼任の東京府巢鴨病院医員の在職は、1904年4月1日から1907年7月26日までである。当然ながら、茂吉と石田とは巢鴨病院在職中に、重なってはいない。そして、1907年7月26日に長崎医学専門学校教授として赴任した。そして、1917年に11月17日付けでアメリカなどの留学を命じられるまで、およそ10年間にわたり長崎医学専門学校で、研究、教育、そして臨床という重責を全うした。とくに石田が大学卒業後3年目にあたる1906年に出版した『新撰精神病学』は、日本における精神医学の教科書として版を重ね、1922年には第9版となった。¹¹

石田昇は、1917年12月19日に横浜を出港した。留学先はアメリカのボルチモアにあるジョン・ホプキンス大学で、アドルフ・マイヤ教授の指導を受けた。しかし、1918年12月12日には、石田は衝撃的な事件を起こした。ボルチモアの地元新聞の見出しに、次のようにある。

在留日本人が同僚を殺害

東洋の神秘のベールに被われた Sheppard-Pratt 病院発砲事件

同じ病院の職員同士、石田昇医師「スパイだと言いがかりをつけられ、George Wolff 医師を撃った」一ほかに動機も¹²

岡田靖雄は「見学中の病院の婦長が自分に恋愛しているのに、同僚の医員ウォルフが同婦長に執心していて自分を不利にみちびくとの被害妄想から、ピストルでウォルフを射殺した」という。¹³ 石田が同僚医師を射殺した理由は判然としないが、周囲に

対して被害的観念に囚われ、さらに迫害妄想を強固にしていっただと思われる。裁判では、精神異常はあるが責任能力はあるとし、終身刑を宣告され、メリーランド州立刑務所に服役した。5年間の服役中に、精神状態がさらに悪化したため、州立精神病院に入院したが改善の兆しがなく、治癒すれば再び米国で服役するという条件で、日本へ送還された。1925（大正14）年12月27日に、東京府立松沢病院西4病棟へ入院した。入院後の石田は「幻聴があり、独語、空笑、奇行、誇大妄想などを抱き、次第に統合失調症性の精神荒廃といわれる状態に陥っていった」¹⁴とある。その後は、1940（昭和15）年5月31日に肺結核により64歳で死去した。

茂吉は、この衝撃的な事件の結果、2年半の留守を預かるという話は反故になったのである。後のこととなるが、茂吉はヨーロッパから帰国後、大正15年4月5日に、松沢病院で石田を見舞った。日記には「月曜。天気吉。（略）石田昇サンニ会フ。歌ナドヲ書イテモラフ。」¹⁵とある。昭和4年11月14日には「木曜日。クモリ、1. 松澤病院ニ行き、三宅先生ニアハントセシモ先生風邪ニテ御欠勤、運動会ヲ見ル。（略）石田昇氏ニ菓子ヲ見舞ニ持ッテ行ッタ。」¹⁶とある。

その後、茂吉は石田が死去する前日、5月30日に風邪で体調が悪かったが見舞いをした。「木曜クモリハレ。午後二時（略）松澤病院ニ石田昇氏ヲ見舞フ。重態ナリ。夫人ニモアフ。廿三年ブリナリ」¹⁷とある。5月31日には「金曜 クモリ蒸暑 ○午前九時半、石田昇氏松澤病院ニテ逝去、噫」¹⁸とある。前任者である石田の動静は、茂吉にとって、かなり気がかりであったが、残念ながら治癒することもなく没したのであった。茂吉は「噫」という嘆息をしたが、その複雑な心境を、この一文字が凝縮しているようだ。石田の一周忌に風邪のため欠席した茂吉は、次の追悼歌を残した。これは、茂吉が事前の引継で大正6年11月7日から13日まで、長崎へ入り、石田に長崎市鳴滝町のシーボルト宅跡などを案内してもらったことを回想しているのである。

鳴滝を共に訪ひたることさへもおぼろになりて
君ぞ悲しき（『霜』石田昇氏一周忌追悼、昭和16年6月10日作）

石田は『新撰精神病学』（初版・明治39年出版）の緒言で次のように記す。当時の精神病患者への時代精神を十分に読み取ることができる。

精神病は社会凡ての階級を通じて発現する所の深刻なる事実なり。如何なる天才、人傑といへども一度本病の蹂躪に遭はゞ性格の光、暗雲の底に埋れ、昏々として迷妄なる一肉塊となり了らざるもの罕ならむ、狂して存せむよりは寧ろ死するの勝されるを思ふ者ある。洵に憐むべきなり。一面より観察する時は精神病学は人性退歩の哀史にて彼の光輝ある向上の学とは全く反対なる径路を行くが如き観を呈す。換言すれば、事、人の眼を蔽うて見ざらむとする暗黒面に関する。然れども明と、暗と、もと吾人の内部に矛盾しつゝ常に存する所の現象に外ならざるを以て、同一なる立脚地より展望すれば、光輝ある向上の学と暗黒なる精神病学とは只僅に仰観すると俯視するとの差異あるのみ、両々相俟って始めて人性の傾向を察すべきなり。¹⁹

この緒言の冒頭は、まさに石田昇の人生そのものを暗示しているかのようである。また、「精神病学は人性退歩の哀史にて彼の光輝ある向上の学とは全く反対なる径路を行く」という表現からも、世間の人々の精神病患者への否定的な眼差しが十分に感ぜられる内容である。

少し振り返れば、1901（明治34）年に巢鴨病院医長に就任した呉秀三は、積年の精神病患者への病弊の追放にのりだし、無拘束・開放・作業という精神科医療の原則に則り、短期間で病院改革を断行した。それは、「収容目的の監禁」から「病者中心の治療病院」へという大きな転換であった。

川上武は「就任早々、それまで長いこと使用されていた手革・足革・縛衣などの拘束具を禁止し、保護室の使用を制限することを定めた。（略）一切の拘束具を焼きすててしまった。（略）また、女子病室で広く用いられていた布団巻きも、制限・禁止を命じた。」²⁰という。さらに、呉は看護人の資質向上にも取り組み、院内教育の充実を図った。また、労働条件や待遇にも配慮した。

精神病患者への治療として、「本格的作業療法を開始し、患者慰藉のための音楽会の開催、精神療法の一

端としての遊戯の導入がはかられた。明治 34 (1901) 年 11 月には女室内に裁縫室二室をもうけ、従来各室の片隅で自分の欲するままに作業していた患者をあつめて一緒に作業させた。また、明治 35 (1902) 年 4~8 月には施療患者中の希望者 (男子 17 名、女子 25 名が参加) に草取り作業をさせ、呉が慰労金を出した。患者の室外運動もなるべく自由にして奨励し、構外運動も一定数に制限 (2 名) して黙許していた。三宅医員が持続浴をはじめて試みたのも、明治 35 (1902) 年である。」²¹という。

石田昇は、恩師である呉秀三の「病者中心の医療」を継承し、長崎医学専門学校において、実践したのであった。石田は開放病棟の試みや、作業療法が有効な精神療法であると考え、院内治療として園内を散歩したり、院内作業に取り組ませたりした。また、石田自身の考案による浴槽を使った持続浴療法などがある。²²

石田は『新撰精神病学』(第 8 版・大正 8 年発行)で次のようにいう。

本邦に於ける最も進歩せる病院に於いては興奮患者を当初閉鎖式病室に収容し、其著しく軽快したる者は之を開放式療法の下に移すを例とす。余は更に一步を進めて如何なる興奮患者も最初より開放式病室に於いて之を治療するの得策なるに想到し、大正 2 年来之を長崎病院の一角に実施したり。是れ保護したる窓戸の印象を患者に与へざるのみにても、少なくともそれ丈の利益ありと思惟したればなり。勿論此種の純然たる開放式制度を実施せむが為には従来よりも多くの附添人と医師の注意とを要す²³

また、『新撰精神病学』(第 7 版・大正 6 年発行)の緒言で次のようにいう。当時の精神医療の状況を知る上で重要であり、引用が長くなるが記す。

ピネル百難を排して精神病者の無強制々度を創始してより茲に 125 年を経たり、爾来病室の構造は牢獄の域を脱して漸次普通病院に接近し来り、閉鎖より半開放に、半開放より更に進んで開放制度に推移せむとするの趨勢に達せり。予は將に來らむとする時代の新潮流を觀望して小規模ながら我長崎病院の一角に純然たる開放式制度を実施し茲に三歳有余の日月を経たり、

蓋し本邦に於ける最初の試みにして窓戸を保護せず、周囲に障壁を廻らさずと雖も今日の進歩せる療法を以て之に臨む時には何等の支障あるを見ず、却って患者の病覚と社交心を刺激し、治療軽快率遙かに従来の閉鎖式病棟の右に出るものの如し。躁暴なる患者を開放病室に収容するは一見危険の觀なきにあらざれども却って之を以て得策とし、必要とする理由は、患者入院後一定時日を経て鎮静し、幾分の觀察眼と判断を以て身邊を見廻す際に当然起り来るべき心理状態に想致せば自ら明ならむ、十分なる日光と新鮮なる空氣と最大限の自由とを与ふるは患者の言行を緩和し、思慮を加へしむる所以にして、純然たる開放式病室は蓋し如上の特長を具備する所の理想的制度と見做すを得べし。予の病棟に未だ一人の自殺者なく、時に逃亡者なきにあらざれども何等重大事件を惹起したる例なき、敢て異とするに足らず聊か病院療法に関する本文の足らざる所を補ひ、以て序となす。²⁴

石田は「本邦に於ける最初の試み」として開放式制度を覚悟と信念をもって導入し、着実に治療効果をあげている自信がこの緒言から読みとれるのである。自殺者も逃亡者もないことが、この画期的な効果を物語っている。とくに、精神科医にとって担当する患者の自殺を体験せざるをえない現実がある。そして、このような最新の治療法を、茂吉が継承することになったのである。

また、長崎医専の卒業アルバムから、中根は「石田昇の写真が掲載されるとともに、彼によるポリクリの様子、椅臥療法(リーゲクール)、持続浴療法(ダウエルバート)が度々みられる」²⁵とある。卒業生への贈る言葉は「薔薇を摘んで棘を捨てよ」であった。まさに自らが開放式療法を実現したように、卒業生に何事へも臆病にならず、恐れることなく果敢に挑戦せよということであろう。

4. 斎藤茂吉と長崎医学専門学校

初代の石田昇に続き、茂吉は 2 代目の長崎医学専門学校精神医学教室の教授となった。精神医学と法医学の講義は、1918 (大正 7) 年 1 月から始まった。また、臨床医として石田昇の精神療法も引き継ぎ、

誠実に病者の治療を行った。大正 10 年の卒業アルバムにおいても、石田昇が開発した椅臥療法（リーゲクール）の実践風景の写真があり、右から 3 人目に茂吉が立っている。²⁶ 石田は「医師は須く好意と忍耐と公明と誠実とを以て患者に接すべし、苟くも患者の興奮を増し、憂愁を加ふるが如きは言談あるべからず。」²⁷という。戦前においては、医者のパターナリズムが強く、医者と患者が垂直な関係であった。そのような状況下で、医者として精神病患者へ辛抱強く誠実に対応するように求めるのである。そして、椅臥療法（リーゲクール）について、石田は次のように言う。

近来虚弱者に対して臥床の代りに車付長椅子を称用す、是れ長椅子の軽便にして、運搬容易に、患者は安臥のまゝ、屢々戸外の清鮮なる空気と十分なる日光とに触れ、従って食思睡眠等佳良なる影響を受くるを得べければなり²⁸

茂吉は、この療法を試みたのである。中根は「長崎時代の精神科医としての業績は、ほとんど記録が残されていないので明らかではないが、精神医療においても彼自身のスタイルがあったとしたい。」²⁹という。これは、茂吉が石田の精神療法を継承したが、さらに改良し、発展させるには到らなかったという意味であろう。茂吉の性格からすれば、確実に継承したと考えるのが妥当であろう。

茂吉は、精神病学と法医学を担当したが、石田昇より譲り受けた「講義ノート」に則り、授業を行っていた。とくに、法医学の授業は苦勞したのである。藤岡によれば、この「講義ノートを忘れて立往生し、学生の前に頭を下げてあやまるという失敗談も語られている。」³⁰という。藤岡は大正 7 年 1 月 8 日、茂吉の第一回目の精神廟学の授業風景を、学生として受講した井上凡堂の回想として、次のように紹介している。

当日吾々はその教室で例の如くガヤガヤと騒音を立てながら先生を待って居た。期待と好奇心をゴッチャにさせながら、臆て扉を排して先生が入って来られ、吾々は一瞬水を打った様に静まり返った。抱えて来た二冊の本を壇上にドンと置かれた。先生はチョビ髭に眼鏡の顔を挙げ、口をとんがらして一と渡り教室を見廻し

てから一寸口角を右に引いて「プシャトリーは講義の判らぬ学科である」と云われたのが如何にもおどけて見えたのでドッと皆が笑った。³¹

緊張し、苦勞をしながらの茂吉の授業が、この数行からも髣髴させる。学生にとって厳しい授業というよりも味わいのある授業であったと思いたい。

おそらく、このように茂吉は石田の業務を、乗り越えることはなかったとしても、授業でも臨床でも少なくとも忠実に遂行し、精進していたとは言えよう。そして何よりも、精神病患者に対する開放式制度は、医者と病者との信頼関係なくしては存在しないのである。

さて、茂吉が長崎へ赴任する前に、東京帝国大学医科大学精神病学教室では、主任の呉秀三の許で、明治 43 年から大正 5 年まで、精神病患者の「私宅監置」の調査が一府 14 県で行われ、その結果が呉秀三、樫田五郎により『精神病患者私宅監置ノ実況及ビ其統計的觀察』として 1918（大正 7）年 6 月 25 日に、東京医事新誌に発表した。この調査報告は、日本の精神病患者に対する劣悪な状況をあばき、国による一刻も早い改善を求めるものであった。その結果、1919（大正 8）年 3 月には、精神病院法が制定された。ここで、精神病疾患の医療に対する、公共的責任の考えが一応ではあるが表明された。さらに、茂吉の勤務した東京府立巣鴨病院が、同年 11 月 7 日に、東京府下松沢村に移転した時期でもあった。なお、参考までに内務省衛生局の統計によれば、全国精神病患者数は 1916 年が 44,225 名、1917 年が 48,640 名、1918 年が 49,429 名である。1918 年を例にすると、人口 1 万人あたり患者数は 8.97、患者のうち精神病患者監護法適用の者の人数は 7,537 人で、総数の比率は 15.3%である。³²

このような時代の潮流のなかで、茂吉は長崎医学専門学校の精神病学の責任者として、その舵取りを任されたのである。なお、当時の教員組織は教授 22 名、助教授 4 名、講師 5 名であった。

そこで、長崎へ赴任後の、医者としての茂吉の心境がうかがえる書簡を見ることとする。

大正 7 年 6 月 28 日、中村憲吉宛には

長崎に来て少し後悔の気味あり、しかし三年間は致し方なかるべし³³

これは、石田昇が留学中の3年間の代理と言うことであるが、「少し後悔の気味」の理由は詳細に書かれていないが、かなり忙殺された日々を過ごしていたものと思われる。さらに9月20日、憲吉宛には学校の授業がはじまって忙しい。講義などはいやではないが、何とかしてごまかして行きたいと思っ
てゐる。³⁴

7月29日、久保田俊彦宛（島木赤彦）には、夏休みもなし、毎日ヘトヘトになりてかへり為事が出来ない。³⁵

とあり、「為事」とは、言うまでもなく、学位論文の作成のことである。

9月20日、平福百穂宛では、次のように言う。

医学の方の勉強も致したく願居り候もおもふやうにならずもうそろそろ一ケ年を経過する処に御座候³⁶

そして、年末には医学研究の資料を収集するために上京している。

11月26日、久保田俊彦宛（島木赤彦）

小生はアララギの事だけ書き他のものは書く興味なしゆうべ鉄幹と晶子にあひ申候、小生わざと謙遜して丁度ばくの方の患者に対するやうにしているいろいろ話をきゝ大に得る處有之候。これ症候を引出す秘訣に候。(略)

小生只今病人を診る事に熱心にて(略)

年末の上京も全く、雑誌（医の）読みにゆくので、同人ともゆつくり会う事出来まじ。これも悪しからず願ふ。上京の事他人には秘密に願ふ。さもないと切角の上京は無駄に終るおそれあり田舎の教員は貧弱にて物足りないけれども、それでも、少々医学の勉強せねばならずと思ふ心おこりたるは、田舎の教師になりたる御蔭にて、ひそかに神明に感謝いたし居り候³⁷

ここで、与謝野鉄幹と晶子に対し、「患者に対するやうに」とか「症候を引出す秘訣」など、精神科医茂吉の顔が垣間見られるのである。

また、12月7日、中村憲吉宛には「僕も少し勉強せねばなくなつて苦しい。東京行も、勉強しに行くのだ。」「少し医学の材料集めに行くゆゑ、いそぐ」³⁸と書いている。臨床医として、精神病者を熱心に診察し、教育者として授業や学生への指導に

熱心に取り組む茂吉の姿が髣髴する。しかし、もう一つの研究者としての仕事、計画通りに行かず、煩悶しているのである。とうとう打開策として、内密に上京し、資料蒐集のために奔走することとなった。

茂吉は1919（大正8）年の第18回日本神経学会総会に出席し、「早発生痴呆ニ於ケル植物性神経系統ノ機能ニ就テ」を発表した。同年末ごろに、前任者の石田昇が休職となり、さらに翌年の9月29日に「依頼免本官」となった。よって、茂吉は留守番役ではない教授となったのである。ところが、論文らしい論文も書かずに教授になったとも言えるのである。その事は、本人は言うまでもなく自覚し、かなり焦燥に駆られたのである。

そして、1921（大正10）年には「緊張病者ノえるこぐらむニ就キテ」³⁹「ニタビ緊張病者ノえるこぐらむニ就キテ。附遺志阻礙生ノ説」⁴⁰の論文を作成した。これは、呉秀三が東京帝国大学医科大学の教授となって、在職25年の祝賀に当たり、記念論文集が計画され、投稿したものである。これらの論文は1925（大正14）年となり『呉教授莅職二十五年記念論文集第壹輯』に掲載された。

このエルゴグラムの実験について、岡田は「エルゴとは、仕事のことで、エルゴグラフとは筋肉作業の経過を記録する装置で、記録されたエルゴグラムは作業曲線であり、また疲労曲線でもある。」⁴¹という。要するに、緊張病のエルゴグラムの実験とは、健康者と精神病者の対照例によって、診断鑑別の補助として役立てようとするものであった。論文によれば、この実験の被験者は、長崎医専の外来、入院患者の中で、緊張病者12例、躁病3例、破瓜病2例、妄想性痴呆4例、麻痺性痴呆5例、癲癇1例と健康者11例を対照としたものである。健康者の被験者には茂吉自らと助手、学生が協力している。論文は、長崎での実験だけだが、青山脳病院でも同様な実験が行われた。

斎藤平義智は「渡欧前後」で、青山脳病院でも長崎からエルゴグラフを持参し、患者に実験したこと回想している。自らも手伝ったが、うまくいかなかったと言う。

此時筆者も御手伝ひをし又対照として実験に供

せられたが、此夏の暑さに先生は勿論患者も自分等も汗だくで閉口したのは忘れられない。

(略) 気がむらで途中で止めて終ったりして中々思ふ通りに行かない。先生は気をいらさせながら独り事のように「うう之でえゝんだ」と云っては汗を拭いて居られた。⁴²

自らも緊張で、額に汗をかき、実験に精を出す茂吉の姿を想像させる。しかし、藤岡は「実験を実施した日数は二十六日間しかなく、しかもとぎれとぎれに行われている。持続的に集中的に実験に打ちこめなかった理由には茂吉自身の不如意な生活と研究の乏しい田舎教員の雰囲気慣れたことで、しかも大正九年には結核を患ったことも影響している。」⁴³という。この結核については後述するが、実験のスケールも小さく、茂吉の一つの事に徹底的に打ち込む、烈しい性格を見ることができないのである。岡田は「組織病理学全盛の時代に、実験心理学の手法で精神症状にせまろうとしたのは、新機軸ではあった。」⁴⁴という。おそらく、恩師呉秀三の記念論文集という切迫した事情がなければ、論文の完成を見なかったとも言えるのである。積極的に研究活動を行うまでには、到らなかったと言えよう。

1921年4月1日に、上野精養軒で行われた呉秀三教授蒞職二十五年祝賀会に出席した。『記念文集第四輯』には、茂吉の「賀歌」が掲載されているが、「仏足石調体」となっている。

しきしまのやまとにしてはわが君や師のきみなれや Pinel Conolly は外くににして

(『つゆじも』「賀歌」大正10年)

精神医学上で、ピネル(1745~1826)は、フランス革命の最中の1792年に、精神病者を鉄鎖より解放し自由にし、拘束を加えずに治療する方法を実施した。また、コノリ(1794~1866)は、イギリスで1839年に、保護衣とその他の拘束用具を使用せぬ無拘束の運動を推進した。そして、「しきしまのやまと」では、呉秀三が精神病者の手錠、足枷の使用を禁じ、作業療法や開放性を組織的に始めたのであった。茂吉は、仏足石歌で呉秀三をピネル、コノリに比すべく医者として、讃仰したのであった。そして、自らもその系譜を継承する医者なのである。

また、茂吉の公務は多岐にわたるもので、法医学

の担当者として1919(大正8)年には、精神鑑定を2件行っている。加藤淑子によれば「法医学領域の昇汞中毒の鑑定(五月二日)、窃盗(七月十八日)殺人事件の被告人の精神鑑定も行った。」⁴⁵という

次に、ヨーロッパ留学前に、島木赤彦へ宛てた「他言無用」とする書簡を見る。ここでは懊悩する茂吉の率直な心情を読み取ることができる。

大正10年1月20日 久保田俊彦宛

(當分以下他言無用) 小生は三月で学校をやめる。そして帰京して體を極力養生する。そして十月頃欧州に留学して少し勉強して来る。名儀は文部省の留学生といふなれど自費なり。名儀だけでもその方が便利だからである。僕はどうしても少し医学上の実のある為事をする必要がある。それには国を離れていろいろの雑務から遠離して専心にならねば駄めなり。小生は外国に行けば必ず為事が出来ると信ず。そこで兎に角行ってくる。病中いろいろ考へてこの結論に達せり。そこで今度帰京したならば、出発迄、アララギの選歌も長崎の連中ぐらゐか、或は全くせずして、医学上の準備をする。或は、都合よくば、「続童馬漫語」ぐらゐは纏めてもよいと思ふ。しかし歌の方はいつでも出来るが、医学上の事は年をとるとどうしても困難になるから、今のうちにせねばならぬ。このこと大兄によく理解して貰はねばならぬ、茂吉がアララギに冷淡になるのは全く情止みがたき為也小生は今まで医学上の論文らしきものを拵へたるためしあらず、そのために暗々のうちに輕蔑されることゝなる。このこと大兄も考へて呉れることゝ思ふ小生は歌の方はずっと駄目になって大兄らより後ろになること必然なれどもそれはいたしかたなし。さう何も彼も出来るわけのものにあらざればなりたゞ茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ、一體小生はこれまで他国に出て他流に交はりしことなかりしが、長崎に来て他流の同僚に交りて、小生も左程劣りはせずといふ自信が出来、学位など持つてゐるものに較べてちっとも劣ってはゐずといふこと分り候ゆゑ、今後は少し為事をすればよ

ろしきなり。石原君ほどの世界的の為事は到底
むづかしいが、普通の人間のやる事ぐらゐは出
来るつもりなり。以上は當分大兄だけ御考へを
願ふ、⁴⁶

茂吉が言う、「医学上の実のある為事」とは、言う
までもなく、学位論文を制作することである。そこ
で、ヨーロッパへ留学し、雑務から離れ研究一途の
生活をすれば、何とか人並みの研究者になれると決
心した。なお石原君とは、「アララギ」の歌友で、物
理学者である東北大学教授の石原純のことである。
茂吉は、長崎医学専門学校教授として、諸先生との
学問的な交流をするなかで心中を察するに、「学位な
ど持ってゐるものに較べてちっとも劣つてはゐず」
と言い、自信をのぞかせてはいるが、裏返せば常に
学位を取得していない劣等感と、一日でも早く取得
しなければ周囲から軽蔑されるのではないかという
強迫観念に苛まれていたのである。そして「茂吉は
医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男
として、それから専門家として残念でならぬ」とま
で、悲痛な叫びを発しているのである。その為には、
「業余のすさび」という歌を断念する決意ものぞか
せている。

さらに、茂吉は体調も万全ではなく、思うように
仕事ははかどらなかつたのである。この書簡から茂
吉の矜持と覚悟と同時に、そこに深い哀しみが読み
とれるのである。

5. スペイン風邪と咯血

1918 年から 20 年にかけて、スペイン風邪と呼ば
れたインフルエンザが、全世界に猖獗をきわめパン
デミー（世界的流行）となった。1918 年秋になり、
この恐懼のスペイン風邪が日本へ上陸し、越年して
全国に猛威をふるった。日本でも約 2380 万人が感染
し、3 年間で 38 万 8 千人が死亡した。⁴⁷ 当時は、
インフルエンザに対する知識も、効果的な治療法も
なかつたのである。しかも交通網の発達により、流
行の拡大が急激となり、激甚なる病魔であつた。長
崎でも大流行し、1919（大正 8）年の暮れに、茂吉
は長崎の石畳を歩き、次の歌をつくった。

寒き雨まれまれに降りはやりかぜ衰へぬ長崎の
年暮れむとす（『つゆじも』大正 8 年）

この時には、自らが関わる「はやりかぜ」ではな
く、他者の眼差しで冷徹に「はやりかぜ」をよんだ
のであつた。

しかし、1920（大正 9）年 1 月 6 日、東京から義
弟の斎藤西洋が長崎を訪れ、妻のてる子と長男茂太
と共に、大浦の長崎ホテルで晚餐をとった。帰宅後
に、茂吉自らが急激に発熱し、寝込み、スペイン風
邪に罹患した。肺炎を併発し、四、五日間は生死を
彷徨し、一時は生命を危ぶむ状況とまで悪化した。
てる子と茂太も罹患したが、比較的軽微な症状で、
すぐに快復した。茂吉は 2 月 14 日まで病臥にあり、
同月 24 日から職場に復帰したが、病み衰えた身体は、
本復にはほど遠かつた。なお、長崎医学専門学校で
は、茂吉と同日に罹患した大西進教授と、その後に
罹患した校長である尾中守三教授が、この病魔によ
り相次いで死亡した。

2 月 16 日付けで、漸く快復した茂吉は、島木赤彦
宛てに次のように記した。

御無沙汰仕りたり一昨日より全く床を離れ、昨
日理髪せり、（略）下熱後の衰弱と、肺炎のあと
が、なかなか回復せず、いまだ朝一時間ぐらゐ
セキ、痰が出て困る。東京の家にも重かつた
事話さず、たゞ心配させるのみなればなり。茂
太も妻も、かへりて臥床、この時は小生も少し
無理して、それで長引いたかも知れず。⁴⁸

どうにか勤務を再開したが、6 月 2 日に突然の咯
血に見舞われた。8 日にも再咯血した。病状が快復
しないので、6 月 25 日になると、県立長崎病院西二
棟七号室に入院し、菅原教授の診察を受けた。10 日
余りの治療であつたが、好転したので、7 月 4 日頃
に退院した。その後、猛暑の中での自宅療養となつ
たが、転地療法を必要とした。そのため、7 月 26 日
から 8 月 14 日まで温泉嶽（雲仙）よろづ旅館へ、
8 月 30 日には佐賀県唐津海岸の木村屋旅館へ、9 月
11 日から 10 月 3 日までは佐賀県小城郡古湯温泉の
扇屋へ逗留し療養した。その間の茂吉の体調につ
いて、手帳の 8 月 25 日と 26 日を見ることにする。

二十五日 朝出ヅ、分量やゝ多く、赤の濃き處
あり（略）晝寐 少し出ヅ（略）仰臥漫録を読
む（「手帳二」）⁴⁹

二十六日 盆 / 午前三時頃痰吐く、朝見るに、

全く紅色にて動脈血も交り居る如し
温泉に出でたる如き色にてあれよりも分量多し、
Haemoptoe なることはじめて気付きぬ、
朝、痰少量、色紅まじる、あとは、血の線を混
ぜず 入浴、淫欲、カルチモン0. 五、原因を考
えふべし 朝、怒の情なくなり、全然人を許し、
妻をも許し愛せんと心おこる。(略)
しづかなる我のふしどにうす青きくさかげろふ
は飛びて来にけり

しづかに生きよ、茂吉われよ (「手帳二」)⁵⁰

Haemoptoe とは、喀血のことである。医者である茂吉は、この喀血はインフルエンザによるものではなく、結核であることを自覚し、覚悟したのである。この血痰は、10月1日まで続く。手帳には、日付、天候の後に、朝だけではなく昼夜を問わず、血痰の分量や色を観察し、あるいは診断している。段々と、血痰の分量が減り、その色が鮮紅色から、淡紅色、黄褐色、黄色へと変化し、快方へ向かっていくことが分かる。良くなったかと思うと、逆戻りし悲観するという、一喜一憂の日々であった。一日も怠ることなく、注意深く、念入りに、執拗なまでに自らの血痰を観察している。まさに、杉田玄白が自らの老いを『耄耋独語』に克明に記したように、医者として自己の肉体を冷徹に観察し、診断している。10月2日となり「全ク出デズ」、その後「不出」「不出」「不出」と連日続く。

10月28日には、学校と病院に復帰し、次の歌をよんだ。

病院のわが部屋に来て水道のあかく出て来るを
寂しみあたり (『つゆじも』「長崎」大正9年)

ところで、8月26日の「手帳」には、「しづかに生きよ、茂吉われよ」とある。この短い言葉には、命旦夕に迫るような心境が、何の誇張も虚飾もなく、自ら、あるがままに吐露されたものである。自らを叱責し病気を克服し、制圧するというよりも、病気をあるがままに受容しようとする茂吉の諦念(レジグナチオン)が凝縮されているのではないだろうか。しかも、年齢差、性格、生活様式などで確執のあった妻のてる子に対し、宗教的な寛容と感謝の念を起こさせている。さらに、前日に正岡子規の『仰臥漫録』を読んでいることにも着目したい。ただの偶然

ではなく、結核から脊椎カリエスとなり、晩年を寝たきりの生活を余儀なくされた子規の病床随筆を読んだことも、結核を自覚したということの証左とも言えよう。

このように、茂吉は1月のインフルエンザの罹患に始まり、その後の喀血により、ほぼ10か月にわたり、体調が悪化し、論文の制作だけではなく、思うような活動ができなかったのである。しかし、「アララギ」(大正9年4月号)に「短歌に於ける写生の説(一)」を発表し、その後8回に亘って写生論を展開した。⁵¹とくに「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。ここの実相は、西洋語で云へば、例へば *das Reale* ぐらいに取ればいい。現実の相などと碎いて云ってもいい。」という実相観入の写生論の確立をみたのである。この写生論を熱中して書き継いだのは、インフルエンザから回復し、喀血で療養生活を送る病中病後にまとめ上げたものである。死を予感し、死に直面した中から生まれたのが、実相観入なのである。

6. まとめ

茂吉は、前任者である石田昇の留学中の代役ということであったが、石田が留学中に惹起した事件により、計らずも代役ではなく、正式の教授となったのであった。その後、茂吉は1921(大正10)年2月28日に、文部省在外研究員を命ぜられた。3月には長崎を去り、上京の途についた。長崎に在任したのは、1917年12月から1921年3月までの3年4か月であった。しかも、その間の8か月間は病氣療養の期間であった。

スペイン風邪で尾中校長が死亡した後には、国友鼎校長となったがすぐに交代し、山田基校長となった。藤岡武雄は、その「山田校長は、軍人膚の気概のある人で、文学を軟弱なものとし、文学をやる者を国賊呼ばわりをして排斥する人であった。歌人茂吉にとってはこの山田校長に対してはがまんできない面があった」⁵²という。校長との反りが合わない事が、留学への一因ではあるが、あくまでも茂吉には、医学上の為事を成し遂げるべき使命があったのである。

茂吉は、1921(大正10)年9月、ヨーロッパ留学

前に、帝室博物館長であった森鷗外を、平福百穂画伯と共に、訪問した。鷗外とは、茂吉が現役医科大学生で、伊藤左千夫に随い観潮楼歌会例会に参加したのが、はじめての出会いであった。

先生は、にこにことして私ども二人を迎えられたが、頭髪を非常に短く刈って、そして背広の服を着て居られたので、私には珍しく感ぜられた。私は久闊を謝した。その時先生は、『斎藤君は西洋に行かれるさうだが、僕などは実にうらやましいね』

こんなことを云はれた。私は西洋に行かうと決心してから、長崎で病気になって長崎を去ってからも、いまだ證候が残ってゐたので、信濃の富士見高原で養生をしてゐたぐらゐで、夜半に目など覚めると、遙々西洋に行つて為事をしようといふのに不安を感じざるを得なかったこともある。そこで先生の無造作な言葉が、私はいかにも力強く響いたのであった。私は急に晴々した面持になって、向うに行つてからの覚悟なんかをいろいろ先生に問うたりした。いま思へば、どうも少しはしゃいで居ただろう。

(『森鷗外先生』)⁵³

茂吉が、年長を前にして「はしゃぐ」とは珍しいことである。とくに、年長で、それも尊敬する鷗外先生の前では、自ら意図したように、闊達に話が出来ず、緊張のため汗をかくであろう茂吉が、留学前の期待と不安の交錯する中で、相当の精神的な昂揚があったのであろう。体調が万全でなく、相当な重荷がある中で、鷗外を訪問し、気が楽になったのである。そこには、年齢差はあるが、医学者であり、文学者である両者だけに相通ずるものがあつたのであろう。

茂吉は、長崎で臨床医、教育者、研究者の三役を担った。教育者としては、1918(大正7)年10月に、一泊二日の行程で、学生の登山隊を率いて温泉嶽に登り、翌日には普賢嶽の紅葉を観賞し、学生と親しく過ごした。藤岡は「日本酒を携えて登山、気つけ薬として学生にのます茂吉、面白い話をして腹をかかえて笑わせる茂吉は、学生に人気のある教師であつた。」⁵⁴という。また、翌年10月の運動会では職員リレーのアンカーをつとめ見事一等になったとい

う。教員として、当然の責務ではあるが、このように学生に交わり、とけ込む、茂吉の姿は、青年の気概を感じさせる。そして、前任者の「講義ノート」を忘れることもあつたが、熱心に授業に取り組んでいたと言えよう。

東京では、巢鴨病院が郊外に移転し、東京府立松沢病院となった。呉秀三がドイツのアルトシェルビッツ癲狂院に学び設計された病院で、精神病院法により監置手続きを要せずに入院できるようになり、作業療法により効果をあげていた。この潮流のなかで、長崎医学専門学校においても、茂吉は、前任者の石田昇の意志を継ぎ、開放式の作業療法などの治療を誠実に行った。中には興奮し、暴力を奮う病者に対して十分に配慮しながら、治療に取り組んだのであった。

ところが研究者としては、茂吉にとって満足な成果を残すことができなかった。呉秀三先生の記念論文集を執筆するのが、精一杯であつた。三役を担う肉体的、精神的な疲労、そして万全でない体調が、研究の進捗を押し止めた。そして、留学を決意させたのであった。

また、「業余のすさび」である作家活動は、すべてを断念したのではなかった。しかも、長崎では歌人の茂吉への大きな期待があつた。アララギとは独立した形で、瓊浦歌会を立ち上げたり、医専の学生による文芸同人誌『紅毛船』の短歌を指導したりした。また、シーボルトの遺跡を訪ねたりした。それは、シーボルトが、呉秀三の医学史の研究テーマであり、伝記を上梓している事に影響していた。

茂吉には、日々の緊張の連続の中で、丸山へ登楼し、学生と出会ったなどの、挿話もある。私生活では、妻てる子との確執があり、孤独な生活を余儀なくされたこともあつた。このように、長崎での日々は、ユーモアと哀しみが、微妙な均衡をもった、人間茂吉のエネルギーが、不完全な燃焼を起こしながらも、愚直なまでに、不器用に生き抜いた姿が見えてくるのである。そして、咯血を体験することで「しづかに生きよ、茂吉われよ」と言うほどの死への自覚と諦念をもち、一方では病気が快方へ向かい生への喜びを感じとった時期なのでもあつた。結果として、留学に向けて、「医学上の為事」を完遂するに必

要な養分を、茂吉は長崎で吸収したのであった。

- ¹ 岡田靖雄『精神病医 斎藤茂吉の生涯』思文閣、2000年、156 ページ。
- ² 同書、157 ページ。
- ³ 呉秀三『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』精神医学古典叢書 13、創造出版、2000 年、47 ページ。
- ⁴ 樫田五郎『日本ニ於ケル精神病学ノ日乗』同叢書 13、243 ページ。
- ⁵ 藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎、1987 年、155 ページ。
- ⁶ 前掲書、158 ページによれば、紀一は 4 月 20 日の投票日に 3,432 票を獲得し、定員 6 名中 3 位で当選した。1917 年の選挙では、選挙人は直接国税 10 円以上を納めた男 25 歳以上である。
- ⁷ 『斎藤茂吉全集』第 33 巻、岩波書店、1973 年、314 ページ。
- ⁸ 第 33 巻、301 ページ。
- ⁹ 第 33 巻、同上。
- ¹⁰ 第 33 巻、307 ページ。
- ¹¹ 石田昇『新撰精神病学』精神医学古典叢書 14、創造出版、2003 年 として第 8 版が復刻している。
- ¹² 中根允文『長崎医専 石田昇と精神病学』医学書院、2007 年、95 ページ。
- ¹³ 岡田、前掲書、153 ページ。
- ¹⁴ 中根、前掲書、114 ページ。
- ¹⁵ 全集、第 27 巻、196 ページ。
- ¹⁶ 同巻、677 ページ。
- ¹⁷ 第 31 巻、222 ページ。
- ¹⁸ 同巻、同ページ。
- ¹⁹ 石田昇、前掲書、第一版緒言。
- ²⁰ 川上武『現代日本病人史』勁草書房、1982 年、318 ページ。
- ²¹ 同書、320 ページ。
- ²² 石田昇、前掲書、87～116 ページで、「精神病の予防法及び治療法」が説明されている。治療法には、薬剤療法、理学的療法、浴治法（水治法）、摂生規定、精神的療法、院内治療があるという。
- ²³ 石田昇、前掲書、114～115 ページ。
- ²⁴ 石田昇、前書、第七版緒言。
- ²⁵ 中根允文、前掲書、72 ページ。
- ²⁶ 同書、127 ページ。
- ²⁷ 石田昇、前掲書、113 ページ。
- ²⁸ 石田昇、前掲書、112 ページ。
- ²⁹ 中根允文、前掲書、127 ページ。
- ³⁰ 藤岡武雄、前掲書、160 ページ。
- ³¹ 同書、160 ページ。
- ³² 岡田靖雄『日本精神科医療史』医学書院、2002 年、178 ページ 表 2「1905－1923 年における精神病患

-
- 者数、そのうち精神病患者監護法を適用されている患者数」を参照。
- ³³ 第 33 巻、328 ページ。
 - ³⁴ 同巻、334 ページ。
 - ³⁵ 同巻、330 ページ。
 - ³⁶ 同巻、335 ページ。
 - ³⁷ 同巻、336 ページ。
 - ³⁸ 同巻、337～338 ページ。
 - ³⁹ 第 24 巻、501～560 ページ。
 - ⁴⁰ 同巻、561～582 ページ。
 - ⁴¹ 岡田靖雄、前掲書、179 ページ。
 - ⁴² アララギ「斎藤茂吉追悼号」1953 年、32 ページ。
 - ⁴³ 藤岡武雄、前掲書、164 ページ。
 - ⁴⁴ 岡田靖雄、前掲書、181 ページ。
 - ⁴⁵ 加藤淑子『斎藤茂吉と医学』みすず書房、1978 年、24 ページ。
 - ⁴⁶ 第 33 巻、410 ページ。
 - ⁴⁷ 東京都健康安全センター年報 56 巻「日本におけるスペインかぜの精密分析」2005 年、369～374 ページ。
 - ⁴⁸ 第 33 巻、372 ページ。
 - ⁴⁹ 第 27 巻、59～60 ページ。
 - ⁵⁰ 同巻、60 ページ。
 - ⁵¹ 藤岡武雄、前掲書、174 ページ。
 - ⁵² 同書、182 ページ。
 - ⁵³ 第 5 巻、149～150 ページ。
 - ⁵⁴ 藤岡武雄、前掲書、162～163 ページ。

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)